2027
1 20 水
10:40～12:10
奈良女子大学
記念館 2階講堂

ものと時間をつなぐ

― 出会いと選択がつないだ、仕事と人生 ―



タンニンなめしの革を用いた製品づくりにこだわり続ける株式会社いたがきの会長・板垣江美氏をお迎えし、ものづくりを通して経験された人生や仕事の転機、人との出会いについてお話しいただきます。これからの生き方や選択のヒントを見つけてみませんか。

プログラム

10:40 - 10:45　開会挨拶　宮路 淳子（奈良女子大学人文社会学領域・教授）
10:45 - 10:50　趣旨説明　寺本 敏紀（奈良国立大学機構企画課 課長）
10:50 - 12:05　講　　演　板垣 江美（株式会社いたがき 代表取締役会長）
12:05 - 12:10　閉会挨拶　小出 直史（奈良カレッジズ連携推進センター・特任准教授）

料金

「なら産地学官連携プラットフォーム」会員の自治体・企業・大学等の関係者：無料
一般の方：1,000円（当日受付にて現金でお支払いください）

※駐車場はございませんので、公共交通機関でお越しください。

定員

150名（先着順）

主　　催：奈良国立大学機構奈良カレッジズ連携推進センター
後　　援：奈良女子大学男女共同参画推進機構
お問い合わせ：奈良国立大学機構企画課奈良カレッジズ連携推進係
（e-mail：yamato-class@cc.nara-wu.ac.jp）

事前申込はこちら
（1/12締切）

定員に達した場合は、期限前であっても募集を締め切らせていただきます。

開催趣旨



板垣氏による講演

前回の講演「ものと時間をつなぐ」は、長年使われていなかった革財布を修理し、再び使い始めたことをきっかけに、ものが人々の思いや時間をつなぐ存在ではないかという問いから生まれました。

講演では、時間と手間をかけて作られるタンニンなめしの革の特徴や、長く使うことで生まれる味わいと価値についてお話しいただきました。また、時代や技術が変化する中でも、基本を大切にし、手間を惜しまずものづくりを続ける姿勢や、熟練の技術を次の世代へ受け継いでいくことの大切さについてもご紹介いただきました。

さらに、長年愛用された鞄や財布の修理を通じて、ものが人々の思いや記憶を受け継ぐ存在となること、製品を販売して終わりではなく、お客様との長いお付き合いや人とのつながりを大切にしてきたことなど、具体的なエピソードを交えながら、ものづくりに込められた思いを語っていただきました。



展示品を紹介する寺本氏



提供：株式会社いたがき「30年以上愛用された同社の製品」

タンニンなめしの革を用いた製品づくりにこだわり、時代の変化と向き合いながら、ものづくりを続けてこられた板垣江美会長。そこには、受け継いできた技術や大切にしてきた価値観を守る一方で、時代に応じて変えるべきことを見極めてきた、数々の選択がありました。

今回は、さまざまな人生の分岐点でどのように考え、何を選び、どう人と関わってこられたのか、具体的なエピソードを通して振り返ります。仕事や人との関わりの中で、迷いながらも決断したこと、思いがけない出会いから新たな道が開かれたことなど、一つひとつの経験に込められた思いや判断に触れます。

お話に耳を傾けながら、自分自身はこれからどのような選択をし、どのように歩んでいくのか、一緒に考えてみませんか。



講演会の様子

登壇者プロフィール



板垣 江美 氏（株式会社いたがき 代表取締役会長）

1962年	東京生まれ。神奈川県足柄上郡開成町で中学校まで過ごし、父の仕事の関係で14歳の時に家族と北海道に移住。
1982年	苫小牧の短大卒業後、さっぽろ東急百貨店での勤務を1年経験。
1983年	創業間もない株式会社いたがきに入社し、ものづくり以外の業務を担当。女性の社会進出が広がる時期と重なり、女性ならではの感覚で、E560タウンボストンを始めロングセラー商品を多数企画。
1993年	結婚を機にドイツに移住、夫とEmi Designを創立。海外素材の調達を開始する傍ら、ドイツ市場に向けたものづくりをスタートし販路を模索。日本市場に向けた商品開発とサンプリングを担当。
2004年	専務取締役に就任し、日本とドイツを往復する生活が始まる。
2012年	代表取締役社長に就任
2022年	代表取締役会長に就任（現在）

株式会社いたがき
ホームページ

主　　催：奈良国立大学機構奈良カレッジズ連携推進センター
後　　援：奈良女子大学男女共同参画推進機構
お問い合わせ：奈良国立大学機構企画課奈良カレッジズ連携推進係
（e-mail：yamato-class@cc.nara-wu.ac.jp）

事前申込はこちら（1/12締切）

定員に達した場合は、期限前であっても募集を締め切らせていただきます。